ペデストリアニズムの諸相

――18世紀末ツーリズムの一断面――

中　島　俊　郎

旅のもっとも簡便なスタイルであり，古来より今日まで一般的に実行されてきた旅の形態は，みずからの足を使って移動すること，つまり歩行である。18世紀後半のイングランド，スコットランドでは交通，運輸手段に一大変革がおこり，それにともなってツーリズムが芽生える局面をむかえようとしていた。鉄道によるマス・ツーリズムが花開く前時代に感性の変化がさまざまな面で起こり複雑に織りなされ，展開していくさまを，もっとも原初的な歩くという行為を基軸にしてツーリズムとペデストリアニズムの重層化した関係を検討するのが本稿の目的である。

I　ツーリズムの胚胎

旅，旅行を楽しむために旅をする人々，つまり旅を享受する旅行者が出現したのは，ほぼ1770年前後，18世紀後半と考えてよい。むろんそれまで多くの人々がいわゆる旅をしていたが，それはあくまで巡礼とか商用とかの現実的な目的があってのことで，旅を愉しむ旅行を目的とするような旅が旅として定着していくには，18世紀後半までまたねばならなかった。

とはいえ旅は万人に解放されていたわけではない。旅人は裕福な階層の人々で，しかもほぼ１ヶ月以上の月日を割くことができるような人たちでなければならなかった。と書いてみたところで具体的な旅人の像は浮かびあがってこないので，旅の記録をのこしているひとりの旅人に登場してもらい，イギリス国内旅行でもっとも人気の高かったスコットランド旅行を敢行した旅人の財力と人物像を素描してみよう。

i）あるツーリストの肖像

ウィリアム・キッチナー（1778-1827）は，18世紀末の旅人として典型的な例となりうるであろう[1]。ウィリアムの父はロンドンで石炭商人をしていて，かなりの財を築いた人であり，テムズ川の河畔に広い土地を所有していた。ただ息子ウィリアムはグラスゴー大学に医学を学びに行くものの学位を取得できず，ロンドンに舞い戻ってきてしまった。その後父の遺産を相続したウィリアムには三つの関心事があった。それは光学，音楽そして美食である。光学についてはカムデン・タウンの天文台近くに住むほどの熱のいれようで，亡くなったときには89台もの望遠鏡が遺されていたという。天文観察を記録した『望遠鏡の観察』（1815）は好評をもってむかえられ，数版を重ねたのち，大著『月世界の理法』（1824）に結実した。また音楽の分野ではオペレッタを作曲したりしていたが，その手になるイギリス海軍をたたえた愛国歌は広く歌い継がれた。キッチナーは大変な蔵書家でも知られていたが，その蔵書の多くは美食にかんする文献であった。美食家として享受する側だけに立つのではなく，キッチナーは実践の人であった。サー・ジョゼフ・バンクス（1743-1820）のシェフ，ヘンリー・オズボームの助力をえて，週に一度，友人たちを招いて食事会を開催していた。彼みずからのピアノ演奏に合わせて招待客はテーブルにつき，料理に舌鼓をうちながら議論を重ねうち興じたという。ただ客人は，ディナー開始の時間に1分でも遅れようものならその日は踵をかえさねばならず，そして午後11時をもってキッチナーの邸宅を辞さなくてはならない鉄則があった。40歳のころに著した『シェフの言葉』（1817）は，食材の吟味から調理法にいたるまで細かく説明されていて，没後も長く刊行されたほど評判が高かった。ヴィクトリア朝の価値観形成に寄与した『ビートン夫人の家政書』（1862）にも大きな影響をあたえている。

---

1 T. Bridge and C. C. English, *William Kitchiner: Regency Eccentric—Author of the 'Cook's Oracle'* (London: Southover Press, 1992).

キッチナーの生活をふりかえってみると，旅人の条件を満たしていることがよく理解できる。まず，知的好奇心に加え旅を実現可能にする財力と時間に恵まれていることである。幸い父から受け継いだ財産によって，彼自身の嗜好を存分に追求できた。旅の関心事が風景を愛で，未知の土地に足をふみいれ，その土地の世俗風俗を味わうことにあるとするならば，その嗜好と一致してくる。キッチナーが書いた『旅人の言葉』(1827) は，出発の心得，旅装の整え方から帰宅してからの旅行記の執筆にいたるまで，旅にまつわるすべてを網羅した，まさに旅行百科全書のような本で，妻エリザベスとふたりで周遊したスコットランド，ウェールズ地方の旅行記も含まれている[2]。ロンドンの自宅を出発してから37日間にわたる旅の記録であるが，この旅をした日数にも注目したい。つまり当時，旅をするには目的地の遠近の差があれども，また国内旅行であっても（キッチナーは外国へ行ったことがない）最低ほぼ1ヶ月間の日数を要したのである。

費用の内分は，遊覧用四頭馬車に週2ギニー，馬四頭分週6ギニー，御者に日当で6シリング6ペンス支払い，交通費として59ポンド12シリング費やし，37日間ウェールズ周遊旅行の代金は，総合計118ポンドにのぼる。この額が一般大衆の収入と比較してみればわかることだが，比較できないくらいの高額であることは予想できる。綿業に従事する熟練職工の日当が2シリングとしてみると，じつに年収にして3年分の収入に相当することが判明してくる。上流階級のステータスを示していた，二輪馬車と馬一頭のロンドンでの年間維持費がほぼ40ポンドであることから計算してみると，ほぼ3倍分の経費がかかっていることになる。旅はいかに高額な出費を強いるものであるか，これで理解できるであろう。だから郵便馬車を使った旅が庶民の手に届くものではなく，道路も整備されていない18世紀末にあって，まさに旅することじたいが社会的，経済的な指標ともなりえたわけである。

ii） 悪路に跋扈する悪漢

交通手段が馬車であった18世紀にあって「歩くこと」にことさら奇異な視線

2 William Kitchiner, *The Traveler's Oracle Containing Receipts for Plain Cookery* (London: Cadell, 1827).

が向けられ，なぜ馬車に乗らず歩くのか，という否定的な含意がこめられたのも無理はない。歩くひとは馬車に乗るひととは異なる意味をおびてくるからである。歩くひとは社会的には低階層で，経済的にみれば貧しい人々であった。階級の差異がことさら強調されるわけだが，それ以上に危険な存在であるとまで考えられていたのである。これには1531年に制定された浮浪者取締法（Vagrancy Act）ともかかわってくる。貧民を，病気や老齢のために働けない困窮者と，健常者でいながら怠惰ゆえに働こうとしない浮浪者に分け，前者には許可書を与えて物乞いを許したが，後者については鞭打ちののち出生地に送還すると定めた。ゆえに道を所在無さそうに歩いているひとは浮浪者と考えられても仕方がなかったわけである。この歩くひとが無為に暮らし危険な存在であるというイメージはロマン派の詩人たちが社会からうける軽侮のまなざしにもなっていたのである。逆にあえて歩くことを実践したロマン派詩人たちは選ばれた孤高を誇っていたわけである。

また歩く環境に目をむければ当時の人々が歩くひとにたいして疑問をなげかけずにはいられなかった理由も理解できるのである。まず劣悪な道路状況をあげることができよう。道は曲がりくねり，平板ではなく，泥でぬかるみ，雨が降っていなくても沼地のような状態で，馬車の轍のために道路上が一様であるところは少なかった。ウィリアム・ハリソン（1534-1593）が『イギリス見聞録』（1577）のなかでイギリスには道路らしい道路などほとんどないと嘆いているが，18世紀になってもそれほど改善されたわけではなかった。国王は夏の期間6日間を道路補修に勤労するようイギリス国民に命じたが，2日目に顔を出すものはまずいなかった。その結果，道路は荒れ放題におちいり，ひどい道になると50フィートあった道幅が12フィートまで縮まってしまい，馬車が通過すると，往来するひとは身体を避けることすらできないほどであった。夏目漱石は18世紀ロンドン市内の道路状況について，「それから現今は何れへ行っても舗石があるが，その頃は舗石のあった町はほとんど数える程しかない。そこで町人や商人がやむをえず，自分の家の前だけを自己の費用で舗石する。然しながら自分勝手にやることだから石の大きさも並べ方も随意である。たいていは石穴から掘り出したままの丸石である。従って町内中凸凹で目を瞑って歩けるような所は一箇所もない。往来の真中は穴だらけ，汚穢物だらけ又水溜りだらけであ

る」(「倫敦」『文学評論』) と漏らしているが，花の都でさえこの有様なのだからロンドン郊外の道，街道がどんな状態におちいっていたかは推して知るべし，である。

またこうした道路であったからこそ治安の悪さも付随しようというものだ。辻切り，追いはぎ，強盗などが出没するのは大前提であって，応戦する武器を携帯せず道中を行くことなどありえなかった。ピクチャレスクツアーを諷刺した戯文に登場するシンタクス博士が自宅を出てすぐ，追いはぎに遭遇したのもけっして偶然ではない[3]。年代記作者ジョン・ストウ (1525?-1605) は，『ロンドン市概観』(1598) のなかで，エリザベス女王の馬車がロンドン市内のイズリントンで悪漢の一団に囲まれてしまい，「転地療養に出ようとした女王はかえって気分が悪くなってしまった」と書いているが，女王が襲われるような落ち着かない治安は，ヘンリー・フィールディングの『ジョゼフ・アンドルーズ』(1742) のなかで旅人が強盗に襲われる場面にあるように，18世紀になってもけっして改善されてはいなかったのである[4]。

3 "By the road side, within the wood, /In this sad state poor Syntax stood;/His bosom heav'd with many a sigh,/ And the tears stood in either eye./ What could he do?—he durst not bawl;/ His noise the robbers might recall;/The villains might again surround him./ And hang him up where they had bound him,/Sure neverwas an hapless wight/ In more uncomfortable plight:/ Nor was this all; his pate was bare,/ Unshelter'd by one lock of hair;/ For when the sturdy robbers took him,/ His hat and peruke both forsook him./ The insect world were on wing,/ Whose talent is to buzz and sting;/ And soon his bare-born head they sought,/ By instinct led, by nature tayght;/ And dug their little forks within/ The tender texture of his skin./ He rag'd and roar'd, but all in vain,/ no means he found to ease his pain:/ The cords, which to the tree had tied him,/ All help from either hand denied him:/ He shook his head, writh'd his face/ With painful look, with sad grimace,/ And thus he spoke his hapless case!" William Comb, *The Tour of Doctor Syntax in Serach of the Picturesque; A Poem,* Canto III (London: Nattali and Bond, 1863), pp.13-14.

4 A.S. Turberville ed., *Johnson's England: An Account of Life and Manners of his Age,* I (Oxford: Clarendon Press, 1933), pp.125-59. Henry Fielding, *Joseph Andrews* (1742).

公道や街道を歩いている人は，乞食か追いはぎかと見まがわれてしまっても無理はなかった。馬車に乗らず歩いている旅人は不信な目をそそがれたわけである。1782年にイギリス国内を旅していたドイツ人牧師カール・モーリッツが一夜の宿を求めて歩きながら宿屋を探したが，いずれの旅籠の主人からもすげない返事をくりかえされるばかりであった。主人の口からは「あいにく満室です」という冷たい言葉のみ。居たたまれないモーリッツは「長椅子でもいいから寝かせてくれ，一泊分払うから」と譲歩し懇願してみたのだが，それでも首を横に振られ断られてしまった[5]。これほどまでに道路を歩行で移動して行くことにたいして社会は不寛容であったわけである。道を歩くひとは乞食か追いはぎであると考えられていたゆえんである。

II　瞑想としての徒歩旅行

18世紀末，つまり1780年から1790年代にかけてのイギリスにおいて旅の形態にこれまでにない変化があらわれた。ヨーロッパ大陸では1789年にフランス革命が勃発し，1799年に統領政府がナポレオンの手によって樹立されていたが，イギリスの貴族はグランドツアーという特権的な旅行をつづけていた。一般庶民は手軽に大陸まで足を伸ばすというわけにはいかず，旅など夢のまた夢であった。限られた裕福な一部の人たちが，イギリス国内旅行を楽しんだ人々の旅行記をむさぼるように読みふけ，まだまだごく少数であったにせよ，自分たちもいつの日にか旅立ちたいものだと願い胸をふくらませるようになりつつあった。ほぼ100年前，女性の旅行家シーリア・ファインズ（1662-1741）は，馬の背に片鞍で横座りのかたちで乗り，イギリス国内をすみずみまで踏破し，みずからの旅を「大旅行」と呼んでいるが，「旅行」という目的をもって旅をするひとはまだ一部の存在でしかなかった。それでも馬車という手段を用いてイギリス国内を積極的に見聞し，旅行という概念に合致するような行動をする人々はわずかながらも確実にいた。国内にせよ，大陸にせよ，移動には馬車を使用するというのが一般的な大原則であった。

---

5 Charles Moritz, *Travels in England: Travels Chiefly on Foot, through Several Parts of England in 1782, Described in Letters to a Friend* (London: John Pinkerton, 1795).

i）ウィリアム・コックス

ところが馬車旅行が隆盛をきわめ，一般的な交通手段の時代にあって，ことさら歩くことにこだわる人々が同時に発生してきたのである。旅をするにしても移動手段としての馬車をあえてしりぞけ，徒歩旅行を敢行する人たちがあらわれた。これは，1780年代から1890年代にかけて，歩行することがきわめて否定的な意味で捉えられていた時代にあってあらわれた特異な現象であった。

あえて歩行を自己の資質追究，研鑽の原理にすえたひとがいた。イギリス国教会牧師であり歴史家であったウィリアム・コックス（1748-1828）は，グランドツアーの家庭教師として1775年から1788年まで三人の貴族の子弟に随行したが，コックスはできるだけ歩くことを賞揚し，みずからも大陸狭しとばかりに歩きまわった。コックスの場合，歴史家として現地にたいして観察眼を光らせつつ歩いて資料を探査し，また史跡，史実を確認し，歴史的記述を完成させていき，『ポーランド，ロシア，スウェーデン，デンマーク旅行記』（1784）を著した。まさに足で書き上げた旅行記であった。歩くことでそれまで見えなかった対象がより克明に見えてくることを教師として教えたかったのであろう。子弟にたいする指導を慰労され，ペングローブ侯爵から詩人ジョージ・ハーバート（1593-1633）の旧教区を褒賞として与えられている[6]。

コックスはみずからの著述のために徒歩旅行を実践していたのであるが，詩作のために徒歩旅行をする詩人たちもいた。オランダ，ドイツ，スイスを歩いて周遊し，『ソネット』（1789）を著した詩人ウィリアム・ボールズ（1762-1850）はそうした意図をたずさえていた旅人のひとりである[7]。徒歩旅行とロマン主義運動は浅からぬ関係にあるが，ボールズの学友ウィリアム・ワーズワス（1770-1850）こそ，その精神を完全に体現し，それを基盤におき詩作をかさねた詩人である。ワーズワスは1790年に2000マイル以上にわたる徒歩旅行をヨーロッパ大陸で企てたが，そのときの体験はその後の人生，詩作にまで深く影響を及ぼすところとなった。

---

6 Jeremy Knight, “Introduction,” in William Coxe, *A Historical Tour in Monmouthshire,* facs. edn (1995), pp.9-24.

7 G. Gilfillan ed., *The Poetical Works of William Lisle Bowles, with Memoir, Critical Dissertation, and Explanatory Notes,* (Edinburgh: James Nichol, 1855). O. Rietmann, *William Lisle Bowles, 1762-1850* (1940)

ii）〈ウォーキング〉スチュアート

きわめて特異なかたちであるが歩行と思索の関係を突出して見せてくれる人物がいる。1783年，インドからイギリスまでを自分の二本の足で踏破してみせた〈ウォーキング〉スチュアートことジョン・スチュアートは，哲学的思索から歩くことにたいして徹底的にこだわり，全世界を踏破し，ある意味でワーズワスの歩行に通底する精神性を共有していた。

徒歩旅行者にたいしてきわめて厳しい目がそそがれていた時代にあって，あえて歩くことに意義を見出そうとする人々が現われたのであるが，歩くことの意味の，ゆるやかでいて激しい推移を，思索する歩行，徒歩旅行，そして歩行の最大限の可能性をもとめた長距離歩行（ペデストリアニズム）に焦点を当てて検討していこう。

〈ウォーキング〉スチュアートことジョン・スチュアート（1747-1822）は，幼少の頃から社会規範を守ろうともしないはみ出しもので，よくいえば自然児であった。1763年，18歳の時，「人類に悲惨と幸福をもたらす原因を見きわめ，幸福を追究」するという青雲の志を抱き，マドラスの東インド会社で書記官になった。東インド会社を辞任後，インド太守の私設秘書やマイソールで軍隊を指揮したりしたが，1776年ごろ，徒歩による世界一周を企て，インド内陸を出発して，ペルシア湾からアフリカのエチオピアを南下して，白地図のままであったアフリカ内部からサハラ砂漠を横断し，アドリア地方，地中海諸国にことごとく足を踏み入れ，1783年，ロンドンに到着した。スチュアートはベジタリアンで，その当時の旅人がかならずしていた武装することもなく全行程をみずからの足をつかった旅を実践してみせたのであった。

1784年，北欧の北スカンジナビアから中央アジア全域を踏破する徒歩旅行を実行したが，その後の1790年頃から奇妙な高邁さに彩られた人間論を出版しはじめたのである。人々が行きかう往来にアルメニア人の民族衣装をまとい，自

己宣伝につとめたが，ソクラテスを説く老水夫みたいだと人々から揶揄されたのであった。自説がイギリス国内で受け容れられないことに腹を立て，アメリカ，カナダを歩きまわりながら講演旅行をつづけていたが，イギリスへもどってきてしまう。その直後，フランス全土を歩きまわりはじめるのだが，ルイ16世が処刑される数週間前，詩人ワーズワスと出会い意気投合した。ワーズワスはスチュアートが雄弁に政治を語るすがたに一驚したという。1795年から1799年までロンドンでの生活に窮乏し，再びアメリカ大陸で講演旅行をつづけたが，歩いているうち留まることを知らず南アメリカ大陸まで行き着いてしまった。1803年以後はロンドンに定住し，思索と歩行の日々にもどり，1822年2月20日に息をひきとった[8]。

スチュアートは，真の意味での教養人で，友人には作家，哲学者，音楽家，政治家が多く，学識は広範にわたり博識をきわめ，八ヶ国語を自由にあやつる「国際人」でもあった。1800年代には彼をテーマにした諷刺画がさかんに描かれ，笑劇『ハーフォード・ブリッジ』の主人公としても登場したが，嘲笑の的になったのが災いしたのか，スチュアート自身が誤解を受けてしまったためか不明であるが，彼自身がエジンバラ大学へ講座開設のため1000ポンドの寄付を篤志として申し出たが拒絶の憂き目にあってしまった。

歩行から生まれた思索の成果として，『道徳的行動の起源発見のための旅』(1790)，『理性の革命，あるいは自然界の万物，人間，人間の知性，道徳的心理，普遍的善についての憲法制定』(1789年ごろ)『最高傑作，あるいは世界を偶然性から体系へと還元するための大論文』(1803)『人間完全論についての黙示録』(1808)，『道徳世界を転がるテニス・ボール　孤独な旅行者による一連の宗教的，歴史的，感傷的瞑想のなかで』(1812)，など30冊以上の著述が残ったが，すべて私家版で出版され，知人のあいだに配布されたのみであった。紙型は歩きながら読めるよう工夫された携帯にふさわしい十二折の小型本であり，その内容は地理学，唯物論，道徳など多岐にわたり思念が傾けられているとおもえば，急に詩文が介入してきて，最後には読者が罵倒叱責されるといった，これ以上ないほど錯綜，迷走をきわめた叙述が綿々と展開されていった。スチュ

8 [W. T. Brande], *The Life and Adventures of the Celebrated Walking Stewart* (1822).

アートのよき理解者であったトマス・ド・クィンシー（1785-1859）は「たしかに天才にはちがいないが，他人に自分の考えを伝達するのは上手くなかったようだ」とスチュアートの人物像を評している[9]。友人たちは，スチュアートを内省的な汎神論をかざし，結婚を前提としない自由恋愛（彼は一生独身であった）を信奉する完全主義者とみなし，「歩く思想家」と考えていたようだ。

スチュアートの代表的な著述である『道徳的行動の起源を求める旅』(1790) にその主張をうかがうことができる。それは，これ以上分析できない事物の終局要素を認め，それら相互の関係を外的，偶然的なものとみる原子論に還元しようという試みである。世界をくつがえすような治安崩壊が切迫し，恐怖に駆られたスチュアートは，母国語である英語が近い将来に滅びてしまうであろうと予感し，自分の全著作をラテン語に翻訳し，地中深く埋めるよう，忠実な読者に向かってメッセージを発した。世界を歩きまわり，思索を重ねた旅人は自分の歩行の果実を深く土のなかに埋め再びよみがえる日を祈ったのであった。

Ⅲ　ジェームズ・プランプターの徒歩旅行

歩くことと思索を連動させ新しい精神を形成しようとする試みは，〈ウォーキング〉スチュアートのように極端な場合もあるが，18世紀末におきていたロマン主義運動の精神的な支柱になっていた事実をいくら強調してもしすぎることはない。ロマン主義運動と徒歩旅行の関係については後に言及するが，ここではひとりの牧師が1790年から1800年まで数度にわたり実行した徒歩旅行（ペデストリアンツアー）を中心に，その意図，目的，精神性を一瞥し，徒歩旅行の意味を問うてみたい。

ｉ）　ペデストリアン・ツーリストの肖像

ジェームズ・プランプター（1770-1832）は，スコットランドの一大観光名所となった湖水地方でくりひろげられる，植物採集に熱狂する女性たち，自然愛好を声高にさけぶ紳士たちの生態を甘美な挿入歌とともにうたいあげた喜劇オペレッタ『湖水地方のツーリストたち』(1798) の作者として，イギリス文学

9 Thomas De Quincey, “Walking Stewart,” *The Works of Thomas De Quincey,* VII. (Edinburgh: A. C. Black, 1863), pp.1-18.

史にその名前をとどめている。

ケンブリッジ大学クイーンズ・カレッジ学寮長であり，ノリッジ主教座聖堂名誉参事会員であったロバート・プランプター（1723-1788）の次男として生れたジェームズは，ヘンリー・ニューカムの経営する学校を経て，クイーンズ・カレッジへ進学するが，ここで人生の転機をはじめて味わうこととなる。父が亡くなったのち，次の学寮長になったジョン・ダッドリーの大学改革の犠牲になり，クレア・カレッジへの転校を余儀なくされてしまったのである。大学に奉職することをあきらめたプランプターは，英国国教会の牧師になるわけだが，高等学校からの夢であった戯曲家志望の夢を次第にふくらませていく。ノリッジではゲーテ，レッシングなどを精力的に翻訳しドイツとイギリス文化の仲介者であり，フランス革命の熱烈な賛美者あったウィリアム・ティラー（1765-1836）を中心指導者にした文化運動が胎動していて，劇，小説，詩を創作する文学サークルが形成されていた。姉のアンとアナベラとともに，ジェームズもこのサークルに属し，文学活動に参加することになった。処女作『修道院での出来事』（1793）は観客から熱烈な支持をえたが（『ノリッジ・マーキュリー』[1793年1月19日号]），次作の悲劇『オズウェイ』（1795）は上劇にはいたらなかった。非国教会派となってフランス革命に共鳴して急進派になった姉たちとはちがい，ジェームズは政治にさほど関心をはらうこともなく，人々の道徳を高揚させることを目的として劇を中心にした活動をつづけ，『観劇講話四篇』（1809）『イギリス戯曲精選』（全3巻，1812）などを著した。一生涯妻帯せず，静かな聖職者の生活をくずそうとはしなかった。

この聖職者の波乱のない生涯のなかで大きな冒険が試みられた一時期がある。1790年から1800年に到るまでに試行された数回の旅行のうちで，1799年の旅行はその規模，質のうえでほかを圧倒している。4月末に出発し，9月末に帰宅

するまでほぼ4ヶ月半にわたる旅行であるが，全行程2236マイルのうち1774マイルすべてを徒歩でこなしたことは注目してよい。

ii） 旅の目的と旅程

1799年の旅の主目的はスコットランド周遊にあった[10]。1745年，1746年のジャコバイトの反乱が鎮圧されたのち，スコットランドにたいする関心がイギリス国民のあいだに広がっていた。ジェームズ・マックファーソン（1736-1796）の『オシアン』真偽論争（1765年以後），ロマン派詩人たちがつむぎだしてくる作品群，ウォルター・スコット（1771-1832）の歴史小説によってスコットランド観光の気運は上昇するばかりであった。プランプターもそうした時代精神を敏感にかぎとり，反応している。旅行記の付録として『オシアン』論争の是非，スコットランドの村で採集したオシアン風な詩作品の断片を収録しているほどである。

プランプターの旅の行程は，ヒンクストンを出発し，ヨークを経由してノーサンバーランド海岸を通過しエジンバラに入り，その後ハイランドに到り，湖水地方にしばらく滞在したのち，帰路を北ウェールズから下り，ミッドランドを経てバーミンガムに到着し帰宅するというものであった。これまた18世紀末旅行者の典型的なスコットランド周遊ルートといえよう。

ルートも典型的であるならば準備のために参照した先行の旅行記，ガイドブックの類もこれまた同じような旅行書をひもといている。サミュエル・ジョンソン（1709-1784）の『スコットランド紀行』（1775）とトマス・ペナント（1726-1798）の『スコットランド周行』（1771）を熟読し，とりわけ前者を範にして同じような行程を組んでいるほどである。湖水地方にツーリズムを起す要因のひとつとなったトマス・ウェスト（1720?-1779）のガイドブック『湖水地方案内』（1778）も忘れずに携帯し，たえず参照している。

旅の関心も当時の旅行者のそれとまったく同じであるといってよいほど似通っ

10 James Plumptre, "A Narrative of a Pedestran Journey through Some Parts of Yorkshire, Durham and Northumberland to the Highlands of Scotland and Home by the Lakes and Some Parts of Wales in the Summer of the Year 1799," in *James Plumptre's Britain: The Journals of a Tourist in the 1790s,* edited by Ian Ousby (London: Hutchinson, 1992), pp.84-180.

ている。山岳や滝，河川といった自然風景を愛で，城や庭園を訪れ鑑賞し，その旅行熱を満たしている。ピクチャレスクツアーが流行している真っただなかにあったため，その理論の主唱者であったユーヴデル・プライス（1747-1829），リチャード・ペイン・ナイト（1750-1824）のもとに歩を向けて，庭園を見学し，ピクチャレスク鑑賞にも余念がない。このピクチャレスク熱の余波か，翌年1800年にはピクチャレスク運動の中心人物であり最大の主導者であったウィリアム・ギルピン（1724-1804）の自宅を訪れ，膝を交え親しく会話をかわしているほどである[11]。

なぜプランプターは馬車旅行をせずに徒歩旅行をあえて選択したのであろうか。そもそも「徒歩旅行」という言葉自体がやや時代遅れになりつつあり，懐古的な響きをもつ言葉になろうとしていた時代に。馬車旅行とくらべると，はるかに安上がりな旅の方法であることはたしかであるが，先に述べた社会習慣からみても，牧師という社会的な立場からして一考をせまられ，改める必然にせまられる選択肢であろう。プランプターが徒歩旅行をあえて選んだのは，時代精神に負うところも大きい。詩人ワーズワス，コールリッジ（1772-1834）た

11 *Ibid.*, pp.171-76.

ちが積極的に行った徒歩旅行の影響力は，プランプターの世代にも深く浸透しつつあったのである。ロマン派詩人が賛美する自然観に共感する面もあったにせよ，プランプターがもっとも魅かれた一面は，深い思索と高邁な思想を支える，豪奢をさけ質素に人間らしく生きるスコットランドの人々の生活ぶりに心から賛同していたのであった。つまりすでに旧習に属するようになっていた時代に，プランプターが徒歩旅行をあえてことさら実践しようとした理由はワーズワスたちが唱えていた思索を深める一手段として考えていたからにほかならない[12]。

こうした考え方の延長で行われるプランプターの徒歩旅行は質実そのものである。身につける衣服，口にする食物，宿泊する旅宿にいたるまでおしなべて「質素」そのものである。瀟洒，豪華を暗示するものはすべて否定される。だからウェールズ地方を旅行中，パン，チーズ，ゆで卵の食事がいかにすばらしいご馳走かと手放しで喜んでいる記述に出会うことになる。湖水地方の政治家宅に招かれたとき，大麦パンとミルクを供されたが「すばらしい食事」と心から満足し，喜んでいる。

食事だけではない。旅宿にしてもプランプターの反応は同じである。いつも質素な宿を心掛けてとっているが，ここでいう「質素」とは「小奇麗」という意味を含んでいない。プランプターの記述によると，それはベッドの下におかれた「尿瓶の中味が始末されていなかった」り，酔っ払ったビール職人と相部屋になり，一晩中酒くさい息に悩まざるをえなかったりしているからだ。湖水地方を訪れてもできるだけ土地の人々の家，つまり民泊を心がけている。

プランプターの徒歩旅行は，瞑想，黙考を通じて自分自身を，強いては人生を観照する自己省察の旅であった。この主目的を実現するために多くの場所，人物への訪問を考えていた。時代精神をあらわしているともいえる，ウェールズの「シャンゴッシェンの貴婦人たち」への訪問はその意図が明確に伝わってくる。ところが旅行記には「シャンゴッシェンの貴婦人たちへの紹介状があったので，お茶への招待状がすぐに手元にとどいた。ただちに邸宅へあがると，ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジのチャッペロー師，スタンレー夫人と

12 Robin Jarvis, "An Anatomy of the Pedestrian Traveller," *Romantic Writing and Pedestrian Travel* (London: Macmillan, 1997), pp.29-61.

その娘に出会う。文学談義にふけてじつに愉快な一夕であった。宿に午後10時帰舎」（8月23日）につづき「邸宅で11時に朝食。貴婦人たちは早起きだが，すでに面会客で立てこんでいた」（8月24日）云々と事実の記述があるだけでいっこうに要領をえない。シャンゴッシェンの貴婦人たちはまさに18世紀末のイギリスロマン主義を体現した現象であるので，ここに詳しく述べておこう[13]。

iii） 聖人詣で－シャンゴッシェンの貴婦人たち

ウォルター・バトラーの娘としてエレナー・バトラー（1739-1829）は，フランスのカンブレーで生れた。当時の慣習として裕福なカトリック教徒の子女はヨーロッパ大陸で教育をうけたものだが，エレナーも例外ではなかった。だがフランス啓蒙思想とベネディクト派修道院の影響を多分にうけた感性ゆたかな少女は，自由思想に心酔し，反宗教的な態度をみせはじめる。フランスからアイルランドへもどってきたこの少女にとって旧弊なアイルランドのカトリック制度は唾棄すべき存在で，権力をかざす神父にいたっては反目の対象でしかなかった。司祭に支配されたような生活をおくる頑な両親との12年間はエレナーにとって挫折にみちた，幽閉されたような日々であったにちがいない。孤独にさいなまれた独房のような暮らしから逃げ出したいと切望していた中年にさしかかろうかという女性（齢すでに30歳になろうとしていた）のまえにひとりの少女が突然あらわれたのである。

セアラ・パンサビィ（1755-1831）は，バスバラー公爵の従姉妹，チェンバー・ブラバゾン・パンサビィの娘で，キルケニーの学校へ転校してきたばかりの，わずか13歳の学童にすぎなかった。キルケニーの街で孤独なふたつの魂が邂逅し，不思議な絆が生れた。ふたりを結びつけたものは，芸術とルソーの自由思想であったかもしれないが，底知れない「孤独」が両者のつながりを深めていったのはまちがいない。というのもお互いが別々に暮らしをしていたのでは幸福になれないと確信したのだから。

とはいえ，ふたりがいくら決心したところで，両家の家族はこのような不始末を許すはずがなかった。セアラは遠縁のもとにあずけられ，エレナーは未来

13 Elizabeth Mavor, *The Ladies of Llangollen: A Study in Romantic Friendship* (Hamondsworth: Penguin, 1973).

の伴侶を見つけるべくフランスのカンブレーにつれもどされてしまう。だが，この引き裂かれたような別離はふたりの結びつきをいっそう強める役割しかはたさなかったようだ。1778年3月30日深夜，男性に変装し，ピストルで武装したふたりは，手に手をとって逃避行を企てた。港まであとわずか2マイルのところで両親の追っ手につかまり，押し戻されてしまう。何度かこのような逃避行を繰りかえしているうちに両家の親は軟化し，ふたりの同棲を認めるところとなった。心の摩擦をどのように解消したかはわからないが，ふたりはウエールズの寒村シャンゴッシェンで静かに暮らしはじめたのであった。

生活時間をきびしく規定して，厳格そのもの生活をおくり，生活費も最小限に切りつめ，読書や造園を通じて自己研鑽につとめ，修道院のような清貧の生活を実践した。やがて世の人々はふたりを隠者と呼ぶようになっていた。そして隠者から聖人へと変貌していく。

共同生活を開始してほぼ2年後，讃美する声を耳にしたシャーロット女王が手紙でふたりの家屋と造園について問い合わせてきたのを皮切りに，ウェリントン将軍が来訪し，詩人ウィリアム・ワーズワス，桂冠詩人ロバート・サウジー(1774-1843)，「リッチフィールドの白鳥」こと女流詩人アンナ・シーワード(1747-1809) たちがふたりを顕彰する詩を書き出したのである。陶器王ジョサイア・ウェッジウッド (1730-1795) は礼賛の弁をまくし立て，ナチュラリストで詩人のエラズマス・ダーウィン (1731-1802) は孫チャールズ・ダーウィン(1809-1882) を従えて，また小説家ウォルター・スコットもふたりのもとを親しく訪れたのであった。詩人バイロン (1788-1824) は，聖歌隊員ジョン・エトルストーンに宛てた「恋文」のなかで「自分たちの愛はシャンゴッシェンの貴婦人たちにも負けない」と告白し，詩人として世に名を成してから，劇詩『海賊』(1818) をふたりのもとへ送り届け，贈呈している。

シャンゴッシェンの貴婦人に注目したのは芸術家だけではない。ジョージ三世は特別年金を贈り，ルイ十六世はエレナーに王冠を贈呈し，ドイツ皇子ピュクラー・ムスコウ (1785-1831) は「ヨーロッ

パでもっとも名高い女性」と惜しみない賛辞をおくったのであった。

なぜこれほどまでにこのふたりが世の注目をあつめ，賛美の対象になったのか，これはふしぎなことである。この初老と中年婦人は芸術家でもなければ作家でもなかった。また美人ともいいがたく，どちらかといえばやや肥満気味でさえあった。ふたりが人々を魅きつけたのは「伝説」に負うところが大きい。同じ年の同じ日に孤児として生を享け，男装の身なりをして世をしのび，その隠棲ぶりからスパイではないかという嫌疑まで流れた。こうした根も葉もない噂が噂をよび，シャンゴッシェンの貴婦人たちの伝説が形成されていったのである。この神格化は今日のフェミニストたちにも訴えるところがあるのか，かなりの支持をえているようである。

ふしぎな隠棲生活，ふたりの奇妙な関係，「プラス・ネワイッズ（新しい館）」とよばれたゴシック式建築の邸宅，骨董品の数々などが噂を助長し，噂が噂をつくっていく下地は用意されていたのである。ひとつの噂はどれをとっても真実ではなかったが，噂の断片は次の断片と結合してさらに大きな噂になっていった。ただ「ふたりは深い友情をはぐくみ，世を避けて暮らしている」という世評は固定されて，ゆらぐことのない伝説をつくりあげたのである。ルソー流の隠遁生活にかぎりない憧れを抱いていた人々はシャンゴッシェンの貴婦人たちを聖人へと祭り上げていった。シャンゴッシェン詣でがたえなかった理由はこのあたりにあるのではないであろうか。

ただ現実の「隠遁生活」はそれほど情感あふれるものではなかったようだ。ふたりにそそがれる好奇の目にはたえがたいものがあったであろう。ロマン主義が横溢する時代にあってこの「ロマンチックな友情」は，作家，思想家たちからひとつの理想像としてたたえられたが（今日でも一部のフェミニストから多大な支持を得ていることはすでに述べたが），本人たちはいたって現実的であったことを忘れてはならない。ふたりはフランス革命を支持していなかったし，庶出の子を身ごもったキッチンメードを解雇するくらいの「保守的な」考え方をしていたのだから。だがプランプターは，この貴婦人たちにみずからの理想をかさねて，憧れの目をふたりに注いでいた。

iv） 盲目の道路建造者

プランプターは徒歩旅行に出るまえに入念な準備をしている。自分が面会しようと予定している人物についても例外ではなかった。知人からの情報をあつめ，実りある出会い，裨益を得れる会談にしようと腐心していた。ジョン・メタカーフ（1717-1810）にかんしては，その伝記（『ジョン・メタカーフ伝―「盲目のジョン」の生涯』[1795]）を熟読して，人となりを理解しようとしている[14]。この高名な道路建造業者にこれほどまでの興味をなぜ抱いたのか，その原因はひとつではなく複数あったと忖度できるが，とにかくこの人物にたいして並々ならない関心をむけていた。プランプターが旅行記のなかに描いた人物像と伝記の記述を比較してみると，プランプターの関心のありかがよく見えてくる。

14 [John Metcalf], *The Life of John Metcalf, Commonly Called Blind Jack of Knaresborough, with Many Entertaining Anecdotes of his Exploits in Hunting, Card-Playing, &. Some Particulars Relative to the Expedition against the Rebels in 1745, in which He Bore a Personal Share; and also a Succinst Account of his Various Contracts for Making Roads, Eresting Bridges, and other Undertakings, in Yorkshire, Lancashire, Derbyshire, and Cheshire; which, for a Series of Years, Have Brought Him into Public Notice, as a Most Extraordinary Character* (York: E. R. Peck, 1795).

ジョン・メタカーフは1717年8月15日に生れたが，4歳で小学校に入学してから2年目に天然痘のため失明してしまう。光を失ったにもかかわらず馬を乗りこなし，水泳にたけ，トランプも玄人はだしであった。賭け事が大好きで闘鶏，競馬に熱中した。ヴァイオリンとオーボエの名手でもあって15歳のときから，ハロゲイトを訪れる人々から演奏料をもらい生計を立てていた。商才に長けていて，すでにこのころから馬の売買を手がけていたという。こうした情熱は異性にも延長していき，数多くの恋愛を重ねたらしい。

20歳の折，地元の宿屋の娘ドロシー・ベンソンを見初め，結婚の約束までこぎつけるが，ほかの女性と無分別をしでかしてしまい，地元ハロゲイトの街にいられなくなり，ロンドンへ追いやられる羽目に。ところが都でリデル大佐の知遇をえて，数々の商売を成功させていく。ある日，ロンドンからハロゲイトへの同行を大佐から求められたジョンは，「馬車で行くあなたと，徒歩で行くわたしのどちらが早く到着するか，賭けようではないか」と大佐に挑戦した。結果は210マイルもの道のりを5日と半日で歩き抜いたジョンに勝利の女神が微笑んだ。ハロゲイト周辺の道が悪路であることを熟知し，また日頃からハロゲイト＝ロンドン間を歩きまわっていて一度通過した道は絶対に忘れないという自信があったためであった。

プランプターの興味をそそったのは，メタカーフが盲人であるという事実のほかに健脚の主であったことであろう。そして，もうひとつ，それは道路建造の実践者でもあったからである。その土地，土地の道路状況について旅行記のなかで何度も言及がなされているが，地域と地域を結ぶ道路にプランプターはつねに目を注いでいた。

1739年，ハロゲイトの町にもどったメタカーフはドロシーが結婚寸前であることを知る。自分にたいして変わらぬ愛情を抱いているのを知るや，結婚式前日ふたりは逃避行することとなった。プランプターはこの一件がよほど気に入ったのか，「ジョンは盲目を理由に人の力をかりたことはなかったが，駆け落ちの合図である窓辺においたロウソクの火を確認するときにはさすがに友人の手をわずらわした」とわざわざ注記している。

ドロシーと家庭をもったジョンは4人の子供に恵まれ，駅馬車事業に進出する。たんに人間を運ぶだけはなく，鮮魚を内陸の都市リーズ，マンチェスター

まで輸送する仕事も手がけるようになる。1745年，ジャコバイトの乱が起きるとヨークのソートン大佐の軍に入隊し，ファルカークの戦いにも参戦している。商才たくましいジョンは，従軍中であるにもかかわらずスコットランド織物を買いつけ，また軍隊の用品運搬にも手を出していく。1751年，34歳の折，ヨーク＝ナレズボロ間の郵便馬車事業に参入するが，このときに生涯を決する事業を見出すのである。新しい交通手段の参入に悪路を補修改築し，新しい道路を開設する必要を痛切に感じるのであった。

1752年の第一次ターンパーク法によってボローブリッジ＝ハロゲイト間に有料道路を通すことになった。この機をとらえたジョンは，測量技師トマス・オーストラーに接近し3マイルごとに料金所を置くように提案した。斬新な考え方にうたれた関係者はさらに新しい橋の建造をもジョンに委嘱してきた。1754年8月に架橋し，500ポンドを手にすることになったため，郵便事業を売却し，道路建設に一身をささげる決心をする。その確実な仕事振りが評判をよび，ランカシャー，ダービィシャー，ヨークシャー，チェッシャー各地から道路建造の依頼が殺到するようになったのである。

メタカーフはハロゲイト周辺が湿地帯であることをよく理解していたため，ヒースとハリエニシダを敷き，そのうえから土をかぶせるといった新工法を編み出した。9マイルの道路をつくるのに400人の作業員を動員し，この工法によって仕上げたが，その後20年間補修の必要がないほどの完成度を示したという。21マイル道路を4500ポンドで，26マイル道路を6500ポンドで請負い，つぎつぎと道路を完成させていった。

メタカーフは生涯をかけて120マイル以上の道路を開通させ，4万ポンドを手にした。この才覚は盲目であるがゆえに慎重をきわめ，細部にまで神経をゆきとどかせた結果であった。

ジョン・メタカーフが道路建設によって地域文化の担い手になった事実はプランプターの心をとらえたのであった。メタカーフと面談中，プランプターが視力を失った惨禍に言い及ぶと，「神様はその人間に最善を授けて下さいます。この視力を失っていなければ最悪の事態が身にふりかかっていたでしょう」と盲目の道路建造者は静かにほほえんだ。牧師であるプランプターは盲人のこの言葉にいたく感銘したのか，「ジョン・メタカーフは4人の子供，9人の孫，35

人のひ孫に恵まれ幸福であった」と旅行記のなかでその記述をしめくくっている[15]。

v） ツーリズムの産業化

プランプターはたんなる旅行家ではなく鋭い社会観察家でもあった。徒歩旅行家としてツーリズムが産業化していく現実にも鋭敏な視線をなげかけている。湖水地方のいくつかの地域にすでに開設されていた「博物館」にかんする記述は，観光産業が今日と同じようなかたちで，熾烈に展開されていた現状を確認させてくれる。

> 「夕食後，クロスウェイト博物館まで歩いていった。旧友の船長が不在であったのは残念だが，健康を害しているわけではないらしい」（8月2日）と旅行記にはあるが，このクロスウェイトとはピーター・クロスウェイト（1735-1808）のことで，極東で4年間軍役についたのち，ノーサンバーランドで税官吏を数年間つとめて，1775年に郷里のケズウィックにもどってきた退役軍人であった。湖水地方にピクチャレスクツーリストが群がる様子を目にして商魂たくましく，ケズウィックの地に博物館を開設し，観光客が求める品を販売していた。クロスウェイト自身が「ツーリスト・ビジネス」とよんでいた実態を，

プランプターが明らかにしてくれる――「湖水地方の全眺望をおさめた自作の地図，ウェストのガイドブック，硬貨，光沢のある鉱物，植物標本などが展示即売されていて，なかでも中国製の鐘はすばらしい。ところが雑多なものを並べ過ぎていて，世界の煙草パイプコレクションなどがあるのはいったいどうしたわけだろうか。また自分の姓を16通りもの綴り字で書き表しているのには首をかしげざるをえない」[16]。

クロスウェイトの自作の地図には，著者である自分のことを「ケズウィック

15 James Plumtre, *op. cit.*, pp.94-95.
16 *Ibid.*, p.145.

船長兼博物館長」と記し，同時に「湖水地方観光でのツアーガイド，船長，地図作成者，水路測量士」と肩書きまで付け加えていた。その最大のヒット商品は『湖水地方七景』(1783-1819) で「ダーウェント湖」「ウインダミア湖」「ウルズ湖」「バセンスウェート湖」「コニストン湖」「クラモック湖」などを網羅していて，かならずウェストのガイドブックにある，湖周辺の絶景をおさめる見所である「ステーション」が書きそえられていたのである。1783年に初刷され，1819年まで何度も版を重ねるほど旅行客から需要があった。

プランプターはつづいて面白い記述をのこしている。「ケズウィックにはもうひとつ博物館があり，ガイド兼植物採集者の［ウィリアム・］ハットンが経営している。そこにはすばらしい植物や化石の標本が展示されている。ただ困ったことにクロスウェイトとハットンは犬猿の仲なのだ」と。つまり湖水地方にはすでに観光業者同志が反目しあうほどの競争があったのである。ハットンと組んだジェームズ・クラークは，湖水地方に何軒かの宿を経営し，ガイドブックも作成，販売していた。クロスウェイトはクラークの『湖水地方ガイド』(1787) を記述が正確でないという理由で博物館では販売しなかったが，どうやら理由は他にあったらしい。クロスウェイトはジョゼフ・ポックリントンと組んで観光業を幅広く展開していた。ポックリントンのことで軽口をたたいた観光客に，クロスウェイトは断固として商品の販売を拒否した，とプランプターは書きそえている。なおクロスウェイトが厳しいコメント，罵詈雑言をとめどもなく書きつけた，クラークの『湖水地方ガイド』がバロー・パブリック・ライブラリーに今日でも架蔵されている。

プランプターの徒歩旅行記は，産業革命が浸透し，囲い込み運動が国土全域にいきわたろうとしていた時期を克明にとらえている。その記録は，そうした激動期に生きたひとりの牧師の価値観，感性を歩くことによって確認しようした証言とも読みとれるのである。1799年の徒歩旅行記の冒頭でこの旅人は，馬車に乗っていては何も見えてこない。自分の足で歩いてはじめて見えないもの

が見えてくる，と自戒をこめて記しているのは印象的である。

Ⅳ　競技としての歩行－ペデストリアニズムの勃興

歩くという行為は，プランプターの徒歩旅行に見られたように精神性と強く結びつく営為である一方，その肉体性の優位を誇大視してしまい，本来の精神性から大きく離反し，逸脱していく傾向もみられたことは注意しておいてよい。

歩くことが競技の対象となったのはすでに1600年頃からみられる。イギリス貴族は馬車で移動するとき，馬車に侍る召使，フットマンを連れていた。フットマンの仕事は，馬車が到着するまえに目的地の宿屋，カントリー・ハウスへ先回りし，主人を迎える下準備を施すのがその任務であった。あるとき，貴族が気まぐれに，どのフットマンが一番早く目的地に着けるか，という先陣争いの賭けに大金を投じた。このようなことがきっかけとなって様々な距離でフットマンを競い合わせる競技が定着したのである。これが徒歩，競歩レースの起源とされている。ルールらしいルールはなかったが，ただフットマンは馬車に遅れることなく歩き，けっして走ってはいけないとされた。

18世紀半ば，長距離の競歩レースが盛んに行われるようになった。一定時間に長距離を歩きぬくことが求められ，多額の賭金が動いたのである。徒歩レースが賭金の対象となったが，ほとんどのレーサーが哀れな最後を迎えている。ちょうどギャンブラーの末路と同じように，徒歩レーサーは，陰惨な最後をたどることを運命づけられているかのようであった。24時間以内，すなわち当日内に少なくとも100マイル，ほぼ160キロの距離を歩き抜くのが通例の競技となり，この100マイル徒歩レースにちなんで，ゴールした選手のことを「センチュリオン」と呼ぶようになった。また1000マイル徒歩レースも開催されていた。19世紀ヴィクトリア朝になると，徒歩レースは一人から多人数にいたるまで，多様な参加者と，長短の距離が設けられた。街と街を結ぶこの競技は一大ブームとなり，ある時期，イギリスで最大のスポーツ，一大娯楽へと変貌を遂げていったのである[17]。

ここで3人の徒歩レーサーに登場願おう。徒歩レースによって人生の転機を

17 “Pedestrianism is without doubt one of one of the oldest descriptions of sport in existence, inasmuch as it is carried on with the implements assigned by nature to

つかんだジョージ・ウィルソン，女性長距離徒歩レーサーの祖であるフィーメール・レーサーことメアリー・マクマラン，最大最強の徒歩レーサー，キャプテン・バークレーである。

妻との離婚さえなければ，ジョージ・ウィルソンの一生は，歩くこと，競歩レースなどとは無縁のはずであった。彼はイギリス人の勤勉さを裏付ける自助独立のひとであり，幸福な人生をおくるはずであったのだが…。

i） ジョージ・ウィルソン

1764年，ジョージ・ウィルソン（1764-1822?）は，ニューキャッスル・アポン・タインに生まれた[18]。父は造船業に従事し，裕福な生活をおくっていたが，倒産の憂き目にあい，ジョージは1771年，7歳のときに靴職人の見習いになった。1785年，21歳で結婚し，古物商をはじめ，店を出すまでになり，副業として教区の税金を徴収する仕事にまで手を広げ請け負ったため，「税金の犬」とさげすまれもしたが，それにもめげず働きつづけ幸福な家庭を築いていった。男の子三人，女の子二人をもうけ，家庭は順風満帆そのものであったが，好事魔多し，というのか結婚して30年近くの歳月を過ぎようかというとき，妻の長年にわたる不倫が発覚したのであった。ウィルソンは，書籍の行商をして国中を飛びまわっていて，

---

the human frame without any external aid whatever. Pedestrianism "proper" is usually understood to include a walking or running contest between two or more men, or between man and time; but jumping, throwing the hammer, putting the weight, and occasionally other contests, are included in the amateur athletic sports which have new become so popular." Stonehenge [J. H. Walsh], *British Rural Sports; Comprising Shooting, Hunting, Coursing, Fishing, Hawking, Racing, Boating, and Pedestrianism. With all Rural Games and Amusements* (London: F. Warne, 1878, [1875]), p.577.

18 George Wilson, *A Sketch of the Life of George Wilson, The Blackheath Pedestrian, Written by Himself* (London, 1815). *Memoirs of the Life and Exploits of Geroge Wilson, the Celebrated Pedestrian, who Walked 750 Miles in 15 Days. with Every Particular of His Being Arrested by the Magistrates; and Anecdotes of His Early Life to the Present Time* (London: Dean & Munday, 1815).

留守がちであったためか，不倫にはしった妻は，家業はおろか家庭もかえりみず，ふたりは離婚する羽目となった。ところが結婚時に妻の叔父から借金をしていたため，離婚によってその借金の件で妻の親族から訴えられ，裏切られたウィルソンの方が罪に問われ債務者監獄に投獄されてしまったのである。

皮肉にもこの刑務所暮しが歩行競争に結びつくことになる。人生のすべてを失い自暴自棄になったウィルソンは，縦11ヤード，横8ヤード（10メートル×7メートル）ばかりの猫の額ほどの刑務所の庭を12時間で9000回以上往復し，延べ50マイル以上もの距離を歩くようになった。刑期を終え出所してから徒歩競争によって生計をたてるようになり，1814年，ロンドンで開催された100ギニーの賞金がかけられたレースに挑み，「1000マイルを20日間で歩き切ってみせる」と豪語した。51歳になっていたウィルソンは，小刻みに足を引きずるような歩き方で街の人気を集め，『タイムズ』紙がウィルソン欄を特設して，日々の歩行距離，速度を掲載したため，小さなブラックヒースの街に国中から何千人もの見物人が詰め掛けたのである。5000ポンド以上の賭金がかけられ，その過熱さからか，ウィルソンを襲撃したり，賄賂をつかませたり，はてには毒をもろうとする者まであらわれた。見事，優勝ゴールを果たしたのだが，報酬目当てで徒歩競争をしたうえに，騒乱まで引きおこした科で，その場で逮捕されてしまったのである。だが治安判事が弁明し，新聞などが擁護の声をあげたため無罪釈放となった。この逮捕劇によってウィルソン熱はかえって一気に上昇し，ウィルソン人気に当て込んだ本が5冊も出版され，諷刺画，版画が飛ぶように売れたのであった。すっかり国民の英雄にまつりあげられたウィルソンは，フランネルのジャケット，木綿のズボンにゲートルを巻き，頭には緑色のジョッキー帽をかぶって颯爽と舞台に何度も登場したという（『ベルズ・ウィークリー・メッセンジャー』[1815年9月24日号]）。この事件以後も徒歩レースを続行していたが，1822年，ニューカッスルで行われた24時間，800マイルレースに参加したのが最後のレースとなってしまった。そのとき，12000人もの観衆が殺到したのだが，満足な報酬をえられなかったのが引退の原因であるといわれている。このレース以後，ジョージ・ウィルソンの行方は杳として知れず，何時，どこで，どのようにして亡くなったのかさえもわかっていない。

ii） 女性徒歩レーサー

徒歩レースは男性ばかりが参加していたわけではない。女性徒歩レーサー（フィーメール・ペデストリアン）として名前をのこしたメアリー・マクマラン（1763-?）はアイルランド生まれで，1820年代，55歳をすぎてから歩くことに興味をいだき，人々から無視され迫害をうけようとも，ひたすら長距離を歩きつづけた。街から街へ渡り歩き，時には長距離徒歩大会をみずから開催し，多いときには600人もの観衆を集めた。62歳のときの記録によると，92マイルを3回，40マイルを1回，20マイルを1回，4日間に92マイルを2回歩いている。食事，休息などをとりながら20マイルを4時間，40マイルを9時間，92マイルを24時間で歩くのがその平均的な歩行記録であった。1822年から27年にかけて息子バーナードもプロの徒歩レーサーとなり母子ともに徒歩大会を求めて流浪の旅をしていたという。歩行中，沿道から心無い野次を浴びせられ，賭けの対象にされ，しばしば歩行妨害をうけたが，徒歩大会からえる収入はわずかであった。それでもメアリーは疲労ひとつみせずに笑顔をたやさず歩きつづけたという。競歩のときのコスチュームは，黒のロングスカートに白のコットンシャツを着用し，色鮮やかなスカーフを巻き，モスリンの白い帽子をかぶり，黒いストッキングをつけていたが靴は一切はかなかった。

女性が長距離を歩くという耐久レースは，社会の認知をえるところとはならなかった。女性が好奇の目に晒され，忍耐をあらわにして金を稼ぐといった行為は，ヴィクトリア朝社会の道徳にそぐわず，ことごとく対立し相容れられなかったからである。

競技としての女性の長距離競争が認知されるのには，マクマラン以後150年以上の年月を必要とする長い道のりがまだ前途に広がっていた。

iii） キャプテン・バークレー

多くのペデストリアンたち（歩行競技者）が群がるなかキャプテン・バークレーは，歩くために生まれてきたような人間で，ひときわ抜きんでた存在であった。ロバート・バークレー・アラダイス（通称キャプテン・バークレー）は，スコットランドのストンヘヴン郊外ユーリ・ハウスで1779年に生まれた[19]。そ

19 The Author of The History of Aberdeen [Walter Thom], *Pedestrianism; or An*

もそも彼の家系は代々にわたって腕力とずば抜けた体力で有名であった。牛と格闘したり，歯で小麦袋を持ち上げ，素手で大木の根を引き抜いたりした。バークレー自身も幼少の頃，大人でもかつげないほどの重い刀で遊んでいた。20歳のとき，体重135キロの大男を床からテーブルへ片手で楽々とかつぎあげた逸話がのこっている。丸太投げやハンマー投げなどは，体力の極限に挑戦する競技であるが，バークレーにとっては「子供だまし」に等しかったのである[20]。

バークレーが後世に名を遺したのは長距離徒歩競争レーサーとしてであった。18世紀から19世紀にかけて長距離徒歩レースは流行のさなかにあった。レース自体が賭けの対象となり，膨大な数の観客がレース目当てに群がってきた。競技者にとってもレースは魅力にあふれていた。勝敗や着順に応じて賭けに歩合をつけてもらえるからである。1801年，バークレーは，90マイルを21時間で歩いてみせると豪語して1000ギニーもの大金を賭けてみせたが，風邪をひいたため敗北してしまう。次に賭金を倍の2000ギニーに引き上げたが，またしても敗れてしまった。最後に勝てば5000ギニーという大勝負に出た。結果，1時間もの余裕をもって勝利を収めたのであった。こうなると最初に負けたのも賭け金を吊り上げるために故意に敗北したのではないかと疑心暗鬼に陥ってしまう。

バークレー歴代の記録を見ておこう。1801年に110マイルの沼地を19時間27分で踏破したのを皮切りに，1805年には朝食と昼食の間に72マイル歩き，1807年には丘陵地帯78マイルをものともせず14時間足らずで走破したのであった。1808年には朝の5時から30マイル歩いて雷鳥撃ちを楽しみ，その後11時間かけて60マイル歩いて家路につき，夕食をとった後16マイル歩き，その後ダンスを

Account of the Performances of Celebrated Pedestrians during the Last and Present Century; with a Full Nar[r]ative of Captain Barclay's Public and Private Matches; and an Essay on Training (Aberdeen; D. Chalmers, 1813) pp.101-204.

20 Walter Thom, "Genealogy of the Family of Barclay of Mathers and Ury, in the County of Kincardine," *Pedestrianism,* pp.257-86.

楽しみ，翌朝の7時に家に戻ってきたという。その翌日は狩猟に行き，130マイルの道のりを2日間一睡もせずに踏破したのであった。

バークレーは観衆にたいして自分がどのように映るかをかなり意識していたようだ。通常の徒歩レーサーが着用するようなユニフォームはいっさい身につけず，独自のユニフォームを着用していた。シルクハットと手袋を手にして，ダンディーをきどるスーツを身にまとい，羊毛の靴下を履き，分厚い靴底のシューズを着用していた。

ペデストリアンの覇者としての名声をほしいままにしたのは，1809年にニューマーケットで開催された1000マイル，1000時間連続歩行大会で1000ギニーの賞金を獲得した勝利者になったからである。つまりこれは，バークレーが時速1マイルで42昼夜断続することなく歩きつづけることを意味していた。バークレーは6月1日に出発し7月12日にその歴史的な偉業を達成したのであった。第一週目の平均速度は14分54秒であったが，最後の週には21分4秒にまで落ちていた。そして出発前に85キロあった体重が，ゴールの42日目には70キロまで落ちていたという。その勇姿を大群衆となった観客が迎えたと『タイムズ』紙は報じているが，賭け金などを合わせてこの競争でバークレーが手にした金額1000ギニーは想像できないほどの額であった［付録・資料1，2］。

1809年に行われたこの大会以後，超長距離を競う大会「バークレー・マッチ」が大西洋をはさんだ両国で盛んに行われ，女性の長距離競歩レーサーまで登場してきたのであった。その中のひとりに有名なエイダ・アンダーソンもいたわけである。

ジャーナリスト，ウォールター・トム（1770-1824）は，キャプテン・バークレーの偉業に感動して『ペデストリアニズム』（1813）を著した。そのなかで，バークレーの歴代記録，ニューマーケット大会の進行記録，今日の著名な銀行一族につながるバークレーの家系を詳説している。バークレー自身も筆をとって訓練方法を開示しているが，その記述によるとバークレーは，自然に飲食を

楽しんでおり，何ら苛酷な訓練をみずからに強いてはいない。だが，身体から不純物を取り去り，発汗をうながす，その訓練法は19世紀のスポーツ訓練に，大きな影響をあたえた[21]。歩行方法も後世に浅からぬ影響をおよぼしたのであった。その歩行フォームは，身体を幾分か前に倒し，ひざに体重をかけて，踵を地面から数センチ上げ，小刻みに歩行を進めるというものであった。

キャプテン・バークレーが夢中になったもうひとつのスポーツにボクシングがある。1807年から1809年にかけての世界チャンピオン，トム・クリッブ（1781-1848）のトレーナーをつとめていた。またバークレーは雀の目を射抜くような射撃の腕をもち，有能な兵士であると同時に，凄腕のギャンブラーでもあった。50歳代になって，バークレーはロンドン＝アバディーン間200マイルを往復する郵便馬車の御者になり，3日3晩でイギリスの都とスコットランドの都市を疾走していた。最後まで走ることにとらわれた，疾走するような人生だったのだが，鉄人バークレーも馬にけられたことがもとで全身麻痺をおこし1854年5月8日に静かに息をひきとったのであった。

表1　徒歩競争者とその記録　短距離と長距離

競技年	競技者	マイル	所要時間
1762	チャイルド	44	7時間57分
1774	リード	10	1時間
1795	トマス・ミラー	36	5時間50分
1700	レヴィ・フィッチヘッド	4	19分

キャプテン・バークレーのほかにもあまたのペデストリアンたちが巷にはあふれていた。［表1］

21 次の2論文を比較すればバークレーの訓練法がどれほど影響力があったか理解できよう。Stonehenge, “Training for Pedestrian and other Purposes.” *English Rural Sports,* pp.592-608. Walter Thom, “On Training,” *Pedestrianism,* pp.221-48.

競技年	競技者	マイル	所要時間
1771	クリス・オーテン	10	57分
1777	ジョゼフ・ヘッドレ	2	9分45秒
1793	ジョン・バレット	5	27分
1802	ハウ	20	2時間20分
1805	キング	26	3時間43分
1807	スティヴンズ	21	2時間15分
1808	キャプテン・トンプソン	21	2時間55分
1762	ジョン・ヘーグ	100	23時間15分
1787	リード	100	24時間
1787	フォスター・パウェル	100	23時間50分
1788	ジョン・バッティ	700	13日19時間
1789	トマス・サベンジャー	429	5日19時間
1790	フォスター・パウェル	396	5日18時間
1792	コースタンス	200	4日
1808	ダウンズ	400	10日
1808	ポッジャーズ	400	8日
1808	ダウラー	500	7日
1809	カニング	300	5日
1810	エドワード・ミレン	100	23時間25分
1811	リミントン	560	7日
1812	ウォリング	136	1日10時間

は，短距離，長距離の徒歩競争を彩った代表選手の「戦歴」のごく一部にすぎないが[22]，『ペデストリアニズム』に収録された歴代のレースとその記録をみれば，18世紀末がいかに「歩く」ことにこだわった時代であったかがわかってくる。ただ競い合う歩行にはその精神性から大きくかけ離れ見世物に堕していく一面があったことは否めない。18世紀初頭からイギリス国内で流行しだし，その世紀末にピークをむかえる徒歩競争は，まさに歩くという行為を極限にまで押しすすめた歩行のかたちだが，精神性をうたいながらも肉体性の誇示へと向かい，その精神性を放棄してしまったのであった。

V　旅の量感と質感

18世紀後半から19世紀初頭にかけて駅馬車，郵便馬車の出現により，これまでにない高速度を人間は体感するようになる。この体験したことのない速度は，速度そのものを追い求めるのと同時に，人間が本来つちかってきた「歩く」ということに改めて注意をうながしたのである。鉄道がもたらした旅の変革，変容についてすぐれたエッセイをのこしたトマス・ド・クインシーは，そのなかで鉄道がもたらした速度を，「われわれとは縁もゆかりもない盲目で無感覚な

22 Walter Thom, “Captain Barclay’s Public and Private Matches,” *Pedestrianism*, pp.101-204.

力の所産」と切り捨て，「速さを耳で聞き取り，目で捉え，スリル満点だと感じ」る郵便馬車の速度を人間の感覚にとって自然なものとして称揚した。ド・クインシーは，人間の生理に順応した郵便馬車の速度を旅の移動という量感ではなく旅人の身体に感じる質感でとらえようとしているのだ。ド・クインシー自身有名なペデストリアンであったが，この比較は鉄道が出現するまでの高速度移動を担っていた馬車と歩行の関係についても適用できる[23]。これまでにない速度の招来はかつてなかったほどの距離移動を誇るようになるのであるが，逆にその質感を問い返されることとなった。つまり馬車などの速度の反動として改めて「歩くこと」への問いかけが行われたのである。この質感への反問は，歩行，歩くことが古来より人間洞察，資質向上の手段としてとらえられていたことに想いをめぐらすことになった。しかもそのような時期にフランスの自由思想がイギリスに入ってきていた。とりわけ「歩行しているときにこそ思索がめぐる。足を止めると思考もとだえてしまう。精神は足とともに働きだす」(『告白』) と歩行と思考の関係を追究したルソーの著述の影響力は無視できないものがあった。その後，詩人ワーズワスをはじめとするロマン主義者からウォーキング運動の祖ヘンリー・ディヴィッド・ソロー (1817-1862) にいたるまで歩行瞑想者の系譜は歩行と思索の関係を連呼しながら連綿とつづいていくことになる。詩人ワーズワスを限りなく尊敬したソローは，歩行，ウォーキングを，ソンタリング（聖地に向かう）という聖域にまでたかめ，そして逍遥（ソンタリング）という行為の背後に潜む精神性を追究した[24]。

本稿で検討した〈ウォーキング〉スチュアートと徒歩旅行（ペデストリアンツアー）にこだわりつづけたジェームズ・プランプターは歩行瞑想者の典型といえよう。同時に並行して歩行の可能性を最大限に追及しようとする現象も発生していた。歩くことに質感，価値を見出すのではなく，「歩くこと」ができる距離を最大限に拡大してみせようとするる，いわば人間の精神性を放棄した肉体性を競う徒歩競争（ペデストリアニズム）が出現し，ヴィクトリア朝中期まで大流行をみせ，社会現象にまでになっていった。

---

23 Thomas De Quincey, “The English Mail-Coach,” *The Works of Thomas De Quincey,* IV, pp. 287-352.

24 Henry David Thoreau, “Walking,” *Atlantic Monthly,* Vol., IX, No., LVI, 1862, pp.657-74.

「ウォーキング礼賛」(1902) を書いたレズリー・スティーヴン (1832-1904) は，彼自身アルプスを「遊び場」と称するほどのアルピニストであり，強靭なペデストリアンであるが，そのエッセイのなかでイギリスのロマン主義運動は「歩くこと」から生れたと高らかに宣言してみせた[25]。だが同時に「歩くことを競うことは虚栄でしかない」とキャプテン・バークレーの実名をあげて徒歩競争をきびしく否定する言葉を併記しなければならなかった[26]。つまり旅が旅行へ変貌していくまえにジョージ王朝からヴィクトリア朝にかけてのイギリスでは旅の原初的な形態である「歩くこと」について，対立するふたつのイデオロギーが存在し，そして実践されていたのである。

25 Leslie Stephen, "In Praise of Walking," *Studies of a Biographer*, IV (London: Smith Elder, 1902), pp.237-66.

26 *Ibid.*, pp.238. Leslie Stephen, "Robert Barclay Allardice," *Dictionary of National Biography,* pp.298-99.

【付録】

1．キャプテン・バークレーの記録

TABLE of Captain Barclay's Pedestrian performances, &c.

Year,	*Matches.*	*Dist. Miles,*	*Days,*	*Hrs. Min.*
1796	For 100 guineas, toe and heel, *(won,)* - -	6		1
1798	With Ferguson, London, *(won,)* - - -	70		14
1799	From London to Birmingham, by Cambridge, -	150	2	
1799	Same distance by Oxford,	150	2	
1800	From Ury to Ellon, and back to Ury, - -	64		12
1801	With Mr. Fletcher for 1000 guineas, *(lost)* -	67		13
1800	From Ury to Boroughbridge in Yorkshire, -	300	5	
1802	From Ury to Kirkmichael, by Crathynaird, -	180	2	
1801	Training for Mr. Fletcher's match, - -	110		19 27
1801	With Mr. Fletcher for 5000 guineas, *(won,)* -	90		20 22
1802	From London to Newmarket, - - -	64		10
1805	From London to Seaford in Sussex, - - -	64		10
1805	From Birmingham to Wrexham, by Shrewsbury, *(betwixt breakfast and dinner,)* - -	72		
1806	From London to Colchester, Essex, *(to breakfast)*	51		
1806	From London to Colchester, Essex, *(to breakfast)*	51		
1806	From Ury to Crathynaird and back, - - -	100	19	
1807	From Ury to Boat of Forbes and back, - -	78	14	
1807	With Abraham Wood for the greatest number of miles in twenty-four hours—Wood resigned, —He walked	40	6	
	Capt. Barclay—*(won,)*	36	6	
1808	From Ury to Allanmore and some other places back to Ury, - -	130		
1808	With the Duke of Gordon's runner from Gordon Castle to Huntly Lodge,	19	2	8
		9		50
1808	With Mr. Wedderburn Webster for 1000 guineas, *(won,)* -	1000	1000 succesive, 123	
1803	With Mr. J. Ward, *(won)*	¼		56
1804	At East Bourne, *(won)*	2		11 57½
1804	For 100 guineas with Cap. Marston, *(won)* - -	1		5 7
1804	With J. Ireland, 500 gs.*(won)*	1		4 50
1806	With Mr Goulbourne, *(won)*	¼		1 12
1803	With Mr. Burke, *(won,)*	1½		

[from Walter Thom, *Pedestrianism,* pp.156-158.]

2．バークレーの1000マイル競争記録（初日と最終日）

TO THE READER.

The following Journal of this extraordinary performance was regularly kept by the attendants, under the inspection of a person appointed by Mr. Webster, for the purpose of watching the time, that his interest might be protected in the event of any failure on the part of Capt. Barclay. It may, therefore, be deemed perfectly correct. In the original, the performance of each hour is certified by the initials of the attendant's name, which we do not think necessary to insert here.

In the first column, the hour of the morning, day, and night, is marked; in the second, the exact time past that hour at which he started; in the third, the exact time at which he returned; and in the fourth, the number of minutes in which he walked the mile. In the last column, the state of the weather is mentioned; and at the foot of the page will be found the total time of performing the twenty-four miles, with the average of each.

First Day.—June 1st, 1809.

Hour.	Started min. past.	Returned min. past.	Time per Mile.	State of the Weather.
N. 12	2	14	12	Rainy.
1	½	15	14½	Fair but cloudy.
2	42	57	15	Do. do.
3	½	14½	14	Do. do.
4	42	56	14	Windy and stormy.
5	½	14	13½	Do. do.
6	40	55	15	Windy and sunshine.
7	½	14½	14	Do. do.
8	41	55½	14½	Very hot.
9	½	14½	14	Do. do.
10	41	55½	14½	Windy and hot.
11	½	15	14½	Cool and pleasant.
D. 12	42½	57	14½	Windy and hot.
1	½	15	14½	Windy and dusty.
2	41½	56	14½	Hot, windy, and dusty.
3	½	14½	14	Do. do.
4	42½	56	13½	Do. do.
5	½	14½	14	Do. do.
6	39	55	16	Stormy.
7	½	14½	14	Moderate.
8	29	45	16	Cool and pleasant.
9	½	15	14½	Do. do.
10	41	55½	14½	Dark and cloudy.
11	½	14	13½	Dark with rain.
N. 12	43	56	13	Clear moon-light, and fair.

Forty-first Day.—July 11.

Hour.	Started min. past.	Returned min. past.	Time per Hour.	State of the Weather.
M. 1	$\frac{1}{2}$	$22\frac{1}{2}$	22	Cold, windy, and dry.
2	33	58	25	Do. do. and cloudy.
3	$\frac{1}{2}$	$24\frac{1}{2}$	24	Do. do.
4	$31\frac{1}{2}$	53	$21\frac{1}{2}$	Do. do.
5	$\frac{1}{2}$	22	$21\frac{1}{2}$	Do. do.
6	35	$56\frac{1}{2}$	$21\frac{1}{2}$	Do. do.
7	$\frac{1}{2}$	22	$21\frac{1}{2}$	Do. do.
8	35	$56\frac{1}{2}$	$21\frac{1}{2}$	Do. do.
9	$\frac{1}{2}$	21	$20\frac{1}{2}$	Do. do.
10	35	57	22	Do. do.
11	4	24	20	Windy and sunshine.
D. 12	33	54	21	Do. do.
1	$\frac{1}{2}$	21	$20\frac{1}{2}$	Do. do.
2	35	56	21	Do. do.
3	$\frac{1}{2}$	21	$20\frac{1}{2}$	Do. do.
4	$35\frac{1}{2}$	$55\frac{1}{2}$	20	Cool and do.
5	$\frac{1}{2}$	22	$21\frac{1}{2}$	Do. do.
6	36	$56\frac{1}{2}$	$20\frac{1}{2}$	Do. do.
7	$\frac{1}{2}$	22	$21\frac{1}{2}$	Do. do.
8	37	57	20	Do. but pleasant.
9	$\frac{1}{2}$	22	$21\frac{1}{2}$	Do. do.
10	35	57	22	Do. do.
11	$\frac{1}{2}$	24	$23\frac{1}{2}$	Do. do.
N. 12	31	56	25	Do. do.

Average time of walking the mile, 21 minutes $38\frac{3}{7}$ seconds.—
Total, (24 miles,) 8 hours $39\frac{1}{7}$ minutes.

[from Walter Thom, *Pedestrianism*, pp. 159-161, and p.201.]